



堀口大學全集

9



堀口大學全集

江苏工业学院图书馆
藏书章

堀口大學全集 9

昭和六十二年十二月十五日印刷
昭和六十二年十二月二十日發行

著者 堀口大學

發行者 長谷川郁夫

發行所 小澤書店

東京都千代田區飯田橋四十二
電話(東京)二六三一九二一八(代)

印刷 精興社

製本 大口製本

製函 日東工業

定價九五〇〇圓

一、本全集は、堀口大學の全業績を、詩、短歌、譯詩、評論・研究、隨想、翻譯作品（小説・戯曲・評論・隨想）等の各分野に亘って、原則として既刊の單行本を中心に編纂したものである。

*

一、本卷（第9卷）には、未刊作品Ⅲと歐文作品を採録した。

一、未刊作品Ⅲは、著者の單行本未収録作品の中から、現在（昭和六十二年八月末日）までの調査によって蒐集されたすべての詩歌作品、及び拾遺として前卷刊行以後に發見された作品をすべて採録した。

一、歐文作品は、自作短歌の佛語譯『TANKAS』と、日夏耿之介の詩作品を佛譯した『POÈMES DE KONO-SOUKE HINATZ』の二點を採録し、その他活字化されなかった『TEMPLES AÉRIENS』等の作品は「未刊歐文作品」に一括して採録した。

一、以上の内容については、本卷解題、及び歐文作品解題に詳説してあるので、参照していただきたい。

一、これらの作品は、著者の近代詩史に於ける役割を明確にする方針に則り、すべて初出發表誌紙（一部は單行本初版）を底本として使用した。また著者の「創作ノート」等から採録した未發表作品については表題の右側に*を附し、著者自筆の草稿及び原稿を底本とした。

一、詩、及び短歌については發表年代順（但し、戦後の詩作品については「創作ノート」が殘存しているので執筆年代順）に排列した。

一、本卷本文の漢字假名遣等は、原則として底本通りとしたが、昭和二十年前半から三十年代全體に及ぶ混用期の用法については著者の慣用（昭和三十年代前半は舊假名遣）に倣って漢字の使用を決定した。

一、正字舊假名遣使用の本文は、次のような場合に限って訂正した。

1 誤字・誤植と判斷されたもの。

〔例〕 西班牙↓西班牙、孤線↓弧線、合常↓合掌、等。

- 2 假名遣の誤り（但し、音便に關する表記は底本通りとした）。
〔例〕 とうとう↓たうとう、ような↓やうな、歌はふ↓歌はう、こわい↓こはい、久遠↓久遠、等。
 - 3 脱字、及び送り假名不足で不自然なもの（「」内は本巻で補ったもの）。
〔例〕 横つて↓横〔は〕つて、等。
 - 4 著者の訛用と判断されたもの。
〔例〕 唱ひ↓唱へ、しんめり↓しんみり、等。
 - 5 俗字・造字（但し、同字と見做される場合は雙方を並用した）。
イ 正字に改めたもの。
〔例〕 耻↓恥、鼓↓鼓、濶↓闊、戲↓戲、涼↓涼、咲↓笑、等。
ロ 雙方を並用したもの。
〔例〕 唇⇄唇、竝⇄並、鋪⇄舗、回⇄回、廻⇄廻、蟲⇄虫、等。
- 一、次のような場合は底本通りとした。
- 1 底本發表當時の一般的慣用と見做されるもので、誤字・誤植とは判断できない用法。
〔例〕 紀念、行衛、業績、自働、等。
 - 2 著者独自の用法。
〔例〕 エブ、天當蟲、等。
 - 3 同語の異書體。
〔例〕 何所⇄何處、翻譯⇄翻譯、ぢつと⇄じつと、著物⇄着物、等。
 - 4 踊り字。
- 一、當時の一般的慣用と見做されるものの中でも、普遍性を缺くと判断されたものは訂正した。

〔例〕 不拘↓拘らず、等。

一、新字新假名遣の本文に於いて、人名等の固有名詞は一部の例外を除き原則として新字新假名遣に訂正した。

〔例外〕 大學、九萬一、等。

一、ルビに關しては各底本が不統一であるため、詩歌作品以外のものは判讀困難な特殊なものを除きすべて割愛した。

一、疑問符・感嘆符の後は一字アキに統一した。

一、散文本文中の「」、『』に關しては、書名のみ「」を使用し、會話の部分に『』が使用されている場合も含めて「」に統一した。

一、底本を訂正出来ない箇所、及び諸々の問題點は、本文の行の右側に〔註〕（「歐文作品」の場合は↑）の記號を附し、校註に記した。

一、以上の處置により、本文と底本との間に異同を生じた場合（但し、原稿を底本とした作品は除外する）は、ルビ・括弧・引用形式の異同以外はすべて校異に摘記した。

一、卷末の解題には「書誌補遺」としてこれまでに未記載の單行本の所在を明確にするとともに、「資料」として第1卷所收の詩集收録作品の初出發表誌紙を明記した。また詩・短歌の全作品を發表順（一部は執筆順）にまとめ整理した。

一、これをもって『堀口大學全集』全十二卷の編輯をすべて終了する。

未刊作品Ⅲ

詩 3

I (明治43年～大正7年)

5

II (大正8年～昭和20年)

39

III (昭和20年～昭和55年)

126

IV 遺稿集『虹消えず』

253

V 校歌・社歌

266

短歌 295

I (明治42年～大正7年)

297

II (大正8年～昭和17年)

339

III (昭和23年～昭和45年)

356

追補 359

拾遺 361

	譯詩補遺	363
	隨想補遺Ⅱ	372
	雜纂補遺	394
	作品細目	405
	校異・校註	429
	解題	443
	年譜	523
*		

歐文作品

TANKAS 3

POÈMES DE KONOSOUKE HINATZ 67

未刊歐文作品 103

TEMPLES AÉRIENS 105

THE LYRIC GARLAND 216

歐文作品細目 227

歐文作品校異・校註 245

歐文作品解題 249

未刊作品Ⅲ

詩

I（明治四十三年～大正七年）

ねむり^{〔註〕}（以下發表三篇全）

濃き紫の甘きねむりよ、

淡綠色の太陽よ、

女よ、

唇よ、

青白き夢遊病者よ、

……やゝありて『つかれ』來りぬ

カナリヤ

日を受けてカナリヤは鳴く

亂れたる女の足音……

うつろなる胸の共鳴

二日酔半透明の汗にじむ頭にいたましくひびく女の

啜泣き……

日を受けてカナリヤは鳴く、

たそがるゝ室

とけつゝある黒きにほひは鉛の如く重く滴り

たそがるゝ六月の野を追はれ來しつめたき風はいたま

しき青葱の香をこゝに忘れ去る――

たそがるゝ室の憂愁……

……そのうちに獨りねころぶ

〔明治四十三年九月「創作」第一卷第七號〕

詩二篇(全)

×

私は十六になりますと云へば、
私も十六になりますと云へば、
やるせないぞえ、二人が心。
あれ神鳴がまた光る。

長老様がこはやと云へば、
長老様がこはやと云へば、
やるせないぞえ、二人がこころ。
あれ神鳴がまた光る。

×

むすめ心のはかなさは
茴香草の花に似る。
やるせないぞえ、ほの青く

夏の一日の暮れゆけば、

まるくふとつた黒猫を

きやつと云ふまで抱きしめて、

冷めたい鼻に頬をあてて、

心ゆくまで泣きもしよ。

骨牌の女王の眼も青き

知らぬ異國もこひしかる。

板繪の鳥の赤と黄に

紅鸚哥も夢に入ろ。

青くはかなきその夢は

空氣草履の音に似る。

〔明治四十四年三月「スバル」第三年第三號〕

朱のあと(發表四篇全)

△

娘十六、見果てぬ夢の、
夢のはかなさ、やはらかさ。

猫の胸毛のやはらかさ。

その日その日を夢みてくらす
娘十六、はかなさ、つらさ。

猫の胸毛のなやましき。

やるせなや、やるせなや、

日のくるるさへやるせなや、

花の散るさへやるせなや。

娘十六やるせなや。

猫の胸毛のやるせなや。

△

かはたれは

そもじこひしう候ぞや。

さくらちるこのかはたれは

ましてこひしう候ぞや。

△

山がらの籠の中でのうらみごと、
籠が小籠でもんどりうたれぬ。

春の夜の街の少女のうらみごと、

様が若うて美しくしうて、つひぞ妬の絶間ない。

ドンファンと呼ぶ少年のうらみごと、

妬や春の夜短かうて、妬や肌身に移り香がまだ足ら
ぬ。

△

「されどかなしき女よ。」

男は心の中で斯うさけんだ。

女はいぎたなくねむつて居た。

男の目は何時か女の唇にひきつけられて居た。

女の唇は爛れた様に赤かつた。

男はなやましげに目を閉ぢた。

風が雨戸をうごかしてすぎた。

「されどかなしき女よ。」

〔明治四十四年四月「スバル」第三年第四號〕

〔街上夜曲〕（十二人連作のうち大學一篇）

×

重くはかなく春の日くれて、
柳並木の若葉の上を
冷たい風がさとにほやかに
吹いて通れば、銀座の街に
夜はひそひそしのび入る。

〔同上〕

ついとさすよなしみるよな
葱のほひの咽ぶよな
うすら明りの銀の鐘。

ほんに思へど思へども
もとの他人になれもせず
いつそ殺してしまはうか
酔ふて死ぬよな毒のんで
いつそこの身を殺さうか

〔女の眼と銀の鐘と〕（發表三篇全）
女の眼と銀の鐘と
薄情女の眼の色は
うすら明りの銀の鐘

ほんに思へど思へども
あだな情にひかされて
あだなこの身につまされて
もとのお前にいま一度
かへつておくれと文か^{かみ}ければ
猫が眼さめてにつけるの
みるくの鐘に顔うつし
みゆうと啼く音のものうさに
先^{さき}の心をはかりかね